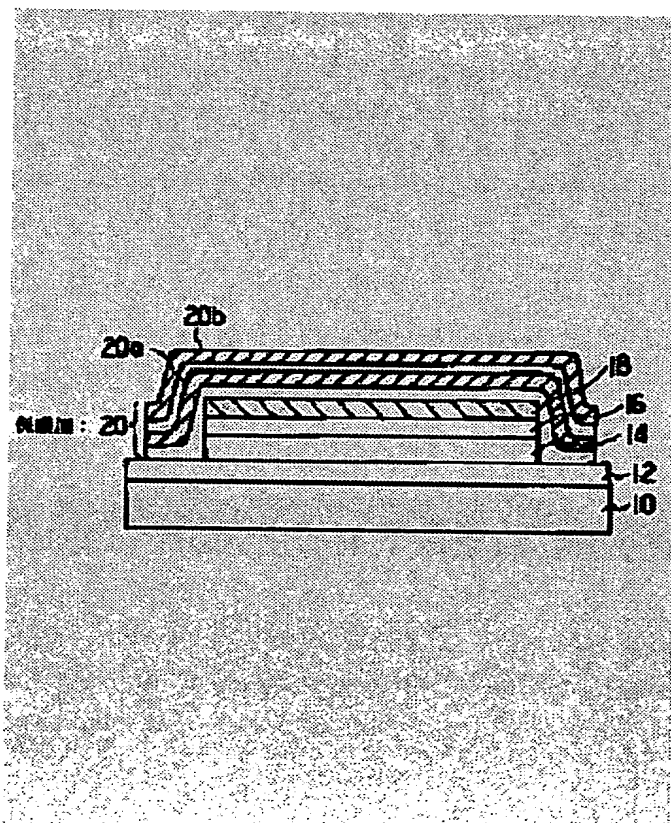


ORGANIC EL ELEMENT

Patent number: JP10275680
Publication date: 1998-10-13
Inventor: TOKITOU SEIJI; NODA KOJI; TAGA YASUNORI
Applicant: TOYOTA CENTRAL RES & DEV
Classification:
- **international:** H05B33/04
- **europaean:**
Application number: JP19970079597 19970331
Priority number(s): JP19970079597 19970331

Abstract of JP10275680

PROBLEM TO BE SOLVED: To prevent the diffusion of moisture into an element and improve heat radiation. **SOLUTION:** A transparent electrode 12, a positive hole transport layer 14, a luminescence layer 16 and a metal cathode 18 are formed on a glass substrate 10. The positive hole transport layer 14, the luminescence layer 16 and the metal cathode 18 are covered to form a protecting layer 20. The protecting layer 20 is formed in a multilayer structure with an insulating layer 20a and a metal layer 20b. In special, the metal layer 20 is provided in the protecting layer, so that the entry of moisture into an element is prevented and heat radiation is improved.



Data supplied from the **esp@cenet** database - Worldwide

BEST AVAILABLE COPY

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平10-275680

(43) 公開日 平成10年(1998)10月13日

(51) Int.Cl.⁶
H 0 5 B 33/04

識別記号

F I
H 0 5 B 33/04

審査請求 未請求 請求項の数 1 O L (全 4 頁)

(21) 出願番号 特願平9-79597

(22) 出願日 平成9年(1997)3月31日

(71) 出願人 000003609

株式会社豊田中央研究所

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番
地の1

(72) 発明者 時任 静士

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番
地の1 株式会社豊田中央研究所内

(72) 発明者 野田 浩司

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番
地の1 株式会社豊田中央研究所内

(72) 発明者 多賀 康訓

愛知県愛知郡長久手町大字長湫字横道41番
地の1 株式会社豊田中央研究所内

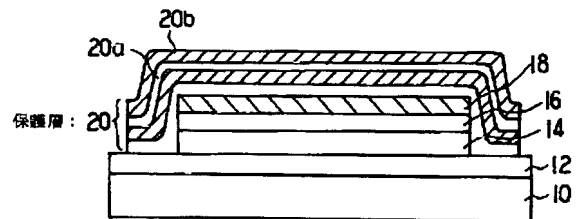
(74) 代理人 弁理士 吉田 研二 (外2名)

(54) 【発明の名称】 有機EL素子

(57) 【要約】

【課題】 素子への酸素水分の拡散を防止すると共に、
放熱性を高める。

【解決手段】 ガラス基板10上に透明電極12、正孔
輸送層14、発光層16、金属陰極18を形成し、正孔
輸送層14、発光層16、金属陰極18を覆って保護層
20を形成する。保護層20は、絶縁層20aと金属層
20bの多層構造となっている。特に、金属層20を保
護層中に有しているため、湿気の素子への進入を防止
し、かつ放熱をよくすることができる。



BEST AVAILABLE COPY

【特許請求の範囲】

【請求項1】 一对の電極間に有機材料からなる発光層を挟持し、両電極からキャリアを発光層に注入することによって発光層を発光させる有機EL素子において、少なくとも一方の電極及び発光層の外側を覆う保護層あって、有機層と金属層の2層または無機層と金属層の2層を含む多層構造からなる保護層を有することを特徴とする有機EL素子。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、一对の電極間に有機材料からなる発光層を挟持し、両電極からキャリアを発光層に注入することによって発光層を発光させる有機EL素子、特にその保護層の構造に関する。

【0002】

【従来の技術】有機EL素子を利用した平面ディスプレイは、次世代のディスプレイとして大きな注目を浴びており、これについての研究開発が盛んに行われている。特に、有機EL素子を利用すれば、直流低電圧駆動、高視野角、自発光などの特徴を有する高解像度ディスプレイが実現可能であり、その利用価値は非常に高いと考えられている。

【0003】この有機EL素子は、例えばガラス基板上に、透明電極（陽極）／正孔輸送層／発光層／金属電極（陰極）を積層形成した構成を有している。また、陽極には仕事関数の大きな物質が用いられ、陰極には仕事関数の小さな物質が用いられる。そして、正孔輸送層及び発光層に有機材料が用いられ、両電極から注入される正孔と、電子が発光層において、再結合することによって発光する。

【0004】ここで、正孔輸送層や発光層に利用する固体有機材料は、水分や、酸素などに侵されやすく、大気中で有機EL素子を駆動するとその発光特性が急激に劣化する。さらに、固体有機材料上に設けられる電極が酸化されないようにする必要もある。従って、有機EL素子では、有機や無機の保護層を設け、素子を封止して大気から隔離する必要がある。例えば、特開平7-192867号公報には、各種の封止方法についての開示がある。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】このように、保護層を設けることによって、有機EL素子の寿命を延ばすことができるが、十分な酸化防止や水分の侵入防止を図ると、放熱性が悪くなってしまうという問題があった。すなわち、保護層の厚みをあまり厚くすると、素子において発生した熱が十分放熱されなくなり、素子の特性が劣化してしまうという問題があった。

【0006】特に、通常の場合、EL素子に要求される輝度は $200\text{cd}/\text{m}^2$ 程度であり、このための駆動電流は mA/cm^2 以下であり、発熱の影響はあまり大

きくない。しかし、有機EL素子では、 10V の印加で $1000\text{cd}/\text{m}^2$ を超える輝度が得られ、最近の研究では、発光層へのドーピングによって、輝度はさらに改善され、 $10\text{万cd}/\text{m}^2$ の輝度が得られるとの報告もある。例えば、有機EL素子を平面光源として利用することを考えると、数 $1000\text{cd}/\text{m}^2$ の発光が必要であり、それに必要な電流は $100\text{mA}/\text{cm}^2$ 以上になる。この場合には、素子温度は、 100°C を超えることになり、輝度の低下や非発光点が発生し、素子の劣化が起こってしまう。従って、このような高輝度の有機EL素子では、発熱量が大きく、この対策が重要である。なお、熱による素子の劣化は、発光層などの有機層の構造変化や電極酸化の熱による加速が原因である。

【0007】本発明は、上記課題を解決するためのなされたものであり、十分な封止が行えると共に、放熱特性のよい有機EL素子を提供することを目的とする。

【0008】

【課題を解決するための手段】本発明は、一对の電極間に有機材料からなる発光層を挟持し、両電極からキャリアを発光層に注入することによって発光層を発光させる有機EL素子において、少なくとも一方の電極及び発光層の外側を覆う保護層であって、有機層と金属層の2層または無機層と金属層の2層を含む多層構造からなる保護層を有することを特徴とする。

【0009】このように、本発明では、電極及び発光層を保護層で覆った。これによって、一方の電極（例えば金属陰極）及び発光層の周囲雰囲気への水分や酸素の拡散を防止することができ、素子の特性劣化を抑制して長寿命化を図ることができる。特に、保護層が金属層を含んでいる。金属層は、非常に緻密な構造を有しており、酸素や水分の拡散を効果的に防止する。さらに、金属層としてアルミなど不動態の酸化皮膜を形成するものを利用することで、酸素の拡散についても効果的に防止できる。

【0010】また、金属層は、熱伝導性が良好であるため、素子において発生した熱を効果的に放散し、素子の加熱を防止することができる。特に、電流量を大きくして、発光量を大きくした場合には、素子の発熱量が大きく、その放熱性に優れていることが重要な要件になる。本発明によれば、このような大発光量の素子においても、特性の劣化を最小限にできる。

【0011】また、電極上に絶縁層を配置すれば、金属層と陰極とを電氣的に絶縁することができる。さらに、最外側に金属層を配置することにより、放熱効果を十分大きなものにすることができる。

【0012】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態（以下実施形態という）について、図面に基づいて説明する。

【0013】図1は、本実施形態に係る有機EL素子の構成を示す図である。ガラス基板10の上面には、透明

電極12が形成されている。この透明電極12は、ITO（インジウム・チン・オキサイド）、 SnO_2 などが利用される。この透明電極12の上に有機材料からなる正孔輸送層14、発光層16が積層形成される。正孔輸送層14はTPD（トリフェニルジアミン）、発光層16はAlq（キノリノールアルミ錯体）等により形成される。発光層16の上には、金属陰極18が形成される。この金属陰極18には、MgAg（9：1）、AlLi（9.9：0.1）、MgIn（9：1）等が採用される。

【0014】そして、この正孔輸送層14、発光層16、金属陰極18の側面を含む全体を覆うように、保護層20を形成する。この保護層20は、絶縁層20aと金属層20bの多層層であり、これらが2層ずつ交互に積層されている。ここで、絶縁層20aには正孔輸送層14や発光層16に用いたものと同じ有機物や、その他低分子、高分子の各種の有機物が利用できる。さらに、この絶縁層20aとして、有機層に代えて、無機層を採用することも好適である。例えば、 MgF_2 などの金属酸化物や半導体化合物の無機層を利用することができる。また、金属層20bにはアルミを用いることができるが、Cr等各種の金属も利用可能である。

【0015】このような有機EL素子において、透明電極12と、金属陰極18とに電圧を印加することで、両電極12、18より、正孔、電子が注入され、これが発光層16において再結合し発光する。本実施形態では、保護層20によって、正孔輸送層14、発光層16、金属陰極18からなる素子部が覆われているため、大気からの酸素、水分の内部への拡散が有効に防止され、素子特性への悪影響を排除することができる。

【0016】特に、本実施形態の素子においては、保護層20が金属層20bを含んでいる。金属層20bは、非常に緻密な構造を有しており、酸素や水分の拡散を効果的に防止する。特に、金属層20bとしてアルミなど不動態の酸化皮膜を形成するものを利用することで、酸素の拡散についても効果的に防止できる。

【0017】また、金属層20は、熱伝導性が良好であるため、素子部において発生した熱を効果的に放散し、素子部の加熱を防止することができる。特に、電流量を $100\text{mA}/\text{cm}^2 \sim 1\text{A}/\text{cm}^2$ 程度と大きくして、発光量を $1000 \sim 10000\text{cd}/\text{m}^2$ と大きくした場合には、素子部の発熱量が大きく、その放熱が重要な課題になる。本実施形態の素子によれば、このような大発光量の素子においても、特性の劣化を最小限にできる。

【0018】また、本実施形態では、金属陰極18上に絶縁層20aを配置したため、これによって、金属層20bと金属陰極18とを電気的に絶縁することができる。さらに、最外側に金属層20bを配置したため、放熱効果を十分大きなものにできる。

【0019】なお、正孔輸送層14、発光層16は50

nm程度、金属陰極18は、200nm程度、保護層20の絶縁層20a、金属層20bは200nm程度の厚さが好ましい。特に、金属陰極18を200nm以上という比較的厚いものにすることによって、放熱を非常に効果的なものにできる。

【0020】また、上述の実施形態では、正孔輸送層14と、発光層16を積層形成したが、混合有機層の一層構成としてもよい。さらに、正孔輸送層14ではなく、電子輸送層を金属陰極18側に設ける構成としてもよい。さらに、透明電極12を陰極とし、対向電極を陽極とすることも可能である。このように、素子部の構成には、現在知られている各種の構成を採用することができる。

【0021】

【実施例】

「実施例1」ITOの透明電極12が予め形成されているガラス基板10上に、真空蒸着により、トリフェニルジアミンを50nm堆積して正孔輸送層14を形成し、その後キノリノールアルミ錯体を50nm堆積して発光層16を形成した。そして、この発光層16上にMgAgを200nm蒸着形成して金属陰極18を形成し、素子を形成した。その後、この素子部の上に、 MgF_2 と、Alを交互に積層し、絶縁層20a、金属層20bからなる保護層20を形成した。この例では、絶縁層20a、金属層20bの厚み両方とも200nmとし、これらを3層ずつ形成した。

【0022】この素子を駆動電流 $10\text{mA}/\text{cm}^2$ で連続駆動して輝度の半減寿命を測定した。初期輝度 $200\text{cd}/\text{m}^2$ で約3000時間の寿命が達成できた（図2参照）。

【0023】一方、金属陰極18まで形成した素子（保護層20なし）において、同様の駆動をしたところ、半減寿命は、約500時間であった。この結果を図2に示す。また、駆動電流を $500\text{mA}/\text{cm}^2$ で連続駆動したところ、図3に示すように、30分以上安定な発光が達成できた。一方、保護層20がないものでは、素子温度が急激に上昇し、約10分で輝度が0となってしまった。

【0024】「実施例2」実施例1と同様の構成で、絶縁層20aとして正孔輸送層14を構成する有機物であるトリフェニルジアミンを採用した。なお、金属層20bとしては、上記と同様にAlを用いている。この素子を駆動電流 $10\text{mA}/\text{cm}^2$ で連続駆動して輝度の半減寿命を測定した。初期輝度 $200\text{cd}/\text{m}^2$ で約2500時間の寿命が達成できた。

【図面の簡単な説明】

【図1】 有機EL素子の実施形態の構成を示す図である。

【図2】 同実施例の寿命を示す特性図である。

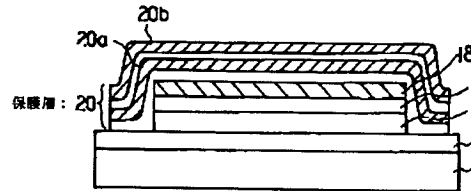
【図3】 同実施例の寿命を示す特性図である。

【符号の説明】

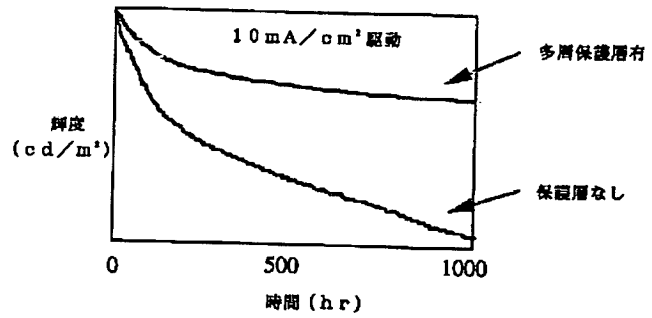
10 ガラス基板、12 透明電極、14 正孔輸送

層、16 発光層、18 金属陰極、20 保護層、20a 絶縁層、20b 金属層。

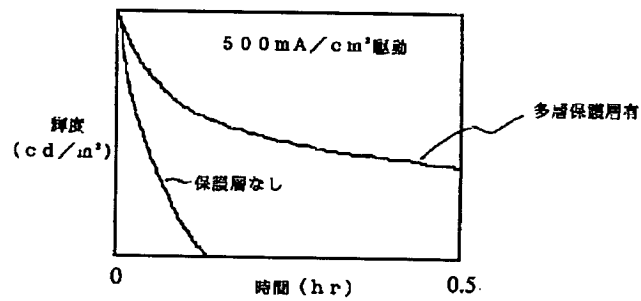
【図1】



【図2】



【図3】



BEST AVAILABLE COPY